保健体育授業の実技における男女共習に対する中学生、高校生、大学生の認識の実態

長江弦樹　（滋賀大学）

１．目的

本研究の目的は、体育（実技）の男女共習授業に対する生徒及び学生の認識を明らかにすることであった。学校種、学年、性、体育に対する好嫌意識、運動に対する好嫌意識、運動の得意不得意、過去及び現在の授業経験、ならびに種目の観点から分析した。

２．研究方法

１）対象者：中学 1 年 286 名、中学 2 年 294 名、中学 3 年 267 名、高校 1 年 139 名、高校 2 年 219 名、高校 3 年 101 名、大学 1 年 195 名であった。

２）調査方法：属性（学年、性別）、体育に対する好嫌意識、運動に対する好嫌意識、運動の得意不得意、過去及び現在の授業経験、体育（実技）の授業全体及び各種目で最も希望する授業形態（「授業全体を通して男女共習」、「話し合いや練習は男女共習」、「話し合いは男女共習」、「授業の始めと終わりは男女共習」、「授業全体を通して男女別」）とその理由を質問した。

３）分析方法：体育（実技）の男女共習授業に対する認識について、目的に記載した各観点から検討するため、独立性の検定（χ^2検定）及び残差分析を行った。種目の観点から検討するため、適合度の検定（χ^2検定）及び多重比較検定を行った。統計的有意水準は 5%とした。

３．結果と考察

学校種：中学生では、「授業全体を通して男女混合」を選択した生徒の割合は有意に低かった（24.2%）。学校種間の移行（中学→高校→大学）に伴って、体育（実技）の男女共習授業を肯定的に捉えている生徒及び学生が増加していた（高校生：34.6%、大学生：52.8%）。

学年：中学 1、2 年生では、男女別習授業を希望する生徒の割合が有意に高かった。一方、中学 3 年生では「話し合いは男女混合」、高校 3 年生では「授業全体を通して男女混合」を選択した生徒の割合は有意に高かった。また、高校 1 年生でも「授業全体を通して男女混合」を選択した生徒の割合が 41%と高く、学年の進行に伴って男女共習授業を肯定的に捉える生徒が増加していた。

過去及び現在の授業経験：「授業全体を通して男女共習」、「話し合いや練習は男女共習」、「話し合いは男女共習」、「授業の始めと終わりは男女共習」においては、過去に経験した授業形態を選択した生徒の割合が有意に高かった。また、全ての授業形態で、現在に経験している授業形態を選択した生徒の割合が有意に高かった。

種目：全ての学校種に共通して、体つくり運動、陸上運動、器械運動、球技（非接触型：バレーボール）、球技（非接触型：卓球等）、球技（非接触型：ソフトボール）、ダンスでは「授業全体を通して、男女混合」又は「話し合いや練習は男女混合」を選択した生徒及び学生の割合が高く、水泳では「授業全体を通して男女別」を選択した生徒の割合が高かった。

４．結論

・学校種の移行（中学→高校→大学）及び学年の移行に伴って、男女共習授業を選択した生徒の割合が増加していた。

・過去及び現在に経験した授業形態を肯定的に捉えている生徒の割合が高かった。

・体育（実技）の授業で希望する授業形態は、種目により異なっていた。

５．主な参考文献

１）山西哲也（2010）男女共習体育授業の実現の可能性と問題, 教育学研究ジャーナル, 6, 61-68.